

RUBeC 演習に参加して

鋒 山 稜 太

Ryota HOKOYAMA

物質化学専攻修士課程 1年

1. はじめに

2017年8月19日から9月4日までアメリカ合衆国のカリフォルニア州にホームステイをしながら滞在し、龍谷大学の施設であるバークレー市内のRyukoku University Berkeley Center (RUBeC)において行われたRUBeC演習というプログラムに参加した。そのプログラムにおいて授業形式による英語による要旨原稿の書き方およびプレゼンテーションにおける話し方を学習した。また、龍谷大学と協定校であるカリフォルニア大学デイビス校およびKEYSIGHT TECHNOLOGIESという企業を訪問した。

2. 授業内容

RUBeC演習中に行われた授業内容は午前中にテクニカルライティング(写真1)、午後から英語のみを使ったプレゼンテーションにおける技術を学習し、最終日に研究内容について発表を行った。ここでは、英語によるコミュニケーション能力を向上させるために授業中は英語のみで取り組んでいった。

午前中のテクニカルライティングでは、事前に提出した要旨を読みやすくするために、授業において学んだ内容を活用して添削を行った。実際に授業において学んだ内容は、接続詞および前置詞、冠詞であり、プリントによる問題および解説によって理解を深めた。また、講師の方に問題点を直接指摘していただいて宿題で徐々に完成度を上げていった。

午後の英語のプレゼンテーションに関しては、2回目の授業で自己紹介を英語で行い、話すときに重要なアイコンタクトやジェスチャー、英語の発音がどこまでできているかを確認した。そして、初めの週の授業においては発音や文章中で単語と単語の区



写真1 テクニカルライティングにおける様子

切りを意識して話す学習を行った。次の週は事前に提出したパワーポイントのスライドの添削を行い、聞き手にわかりやすいようにできるだけシンプルなスライドにすることを試みた。

テクニカルライティングおよび英語によるプレゼンテーションを通して感じたことは、英語でコミュニケーションをとる難しさとともに研究内容を分かりやすく説明することの難しさであった。

3. 企業訪問

企業見学としてKEYSIGHT TECHNOLOGIESを訪問した(写真2)。その企業は電子計測機器のハードウェアおよびソフトウェアの開発を行っており、2014年に設立した会社であった。KEYSIGHT TECHNOLOGIESではソフトウェアに重点を置いており、今ではハードウェアとソフトウェアの両方の開発において952件の特許を取得していた。

日本企業との類似点は化学系の部署が材質開発を行い、デバイスの開発を工学系の部署が行っており、作業を分担していた点であった。一方、日本の企業との相違点は各部署において社員が気軽に休憩をとれるように休憩所がこまめに配置されていた点であった。このようなことからアメリカの企業では日本の企業と比べて社員が働きやすい環境が作られていたように感じた。また、実際にされていた仕事に関して述べると、強い印象を与えたのは工学部署の単純作業の機械による工程である。KEYSIGHT



写真 2 企業訪問時の様子

TECHNOLOGIES ではソフトウェアの開発において単純な計算作業をプログラムを組んだコンピューターによって行っていた。この単純作業を行うコンピューターは全てこの企業のエンジニアたちによって設計されたものであった。この自主的に作業をよりよくしていこうという姿勢に感銘を受けた。また、エンジニアたちにそのような環境を作り出している企業の方針も日本が見習うべき点であると感じた。

4. 協定校訪問

今回訪問させていただいたカルフォルニア大学デビス校は全米の大学で 27 番目に偏差値が高い大学であった。約 3 万人の学生および約 8 千人の教授が在籍しており、キャンパスの学生の数の多さや活気に驚きを覚えた。また、カルフォルニア大学デビス校が有していた敷地はカルフォルニア大学パークレー校に比べて非常に広大であった。そのため、学内における移動手段として自転車が利用されていた。これは日本の大学の規模に比べてアメリカの大

学の規模が比較にならないくらい巨大であることの象徴であるあるように感じた。大学の敷地の規模もさることながら、在籍している学生の気質は非常に自主性があり、好奇心に溢れていた。具体的に述べると、学生は積極的に講義に参加し、その講義を行った教授の研究に興味を持てば自由に研究室に通い研究を行っていた。このことからアメリカの学生は日本の学生と比べて明らかに研究に対するモチベーションやとらえ方が全く異なるということに気づいた。さらに、これを助長している要因として、他学科や企業とのコラボレーションが考えられた。コラボレーションをすることによって、生み出したアイデアに次々に工夫が加えられて目に見える形になる過程が整えられているということを実感した。アイデアを実現するためもっと日本の大学もこのシステムを積極的に取り入れていくべきであると感じた。

5. まとめ

今回 RUCeC 演習全体を通して海外の文化に触れ、日本とは違った点や類似する点を身をもって感じられたことはこれからの生活に良い影響を与えていくだろうと感じた。特に違った点である日本との文化や言葉の違いにおいて、日本では当たり前のことや伝えたいことが上手く伝えることができないことがあった。この経験から、海外の方と話すときは相手を知るために文化や生活様式について質問するべきであったと感じた。また、世界史について学んで海外の方とのコミュニケーションに活かしていきたいと強く思った。